

カンキツ類（温州ミカン、レモン類、ユズ類、雑柑類）

（黒ボク土）

〔土壌肥料〕

保水力のある肥沃な土壌を好むので、乾燥の激しい土壌では生育が劣る。根群分布は比較的浅く、根域は樹冠内におさまり易い。多肥を好む果樹だが、枝梢の生育状況や収量、また生育ステージ等に応じて調節が必用である。

土壌表面管理としては、清耕法、草生法、有機物によるマルチ法などがある。土壌中の有機物を増加させ、土壌の団粒化を図ることで安定した養水分環境を確保する。

〔病虫害・雑草防除〕

そうか病やかいよう病は、降雨を考慮しながら発生初期の防除が必要である。また、窒素肥料の過多による軟弱徒長は病害を助長するので、適正樹勢を保つ施肥管理は病虫害防除の観点からも重要である。風通しの悪い園では、カイガラムシ類やアブラムシ類、ハダニ類の発生が多いので、適正な整枝・せん定管理を行う。アゲハチョウが繰り返し産卵するので、卵や幼虫はこまめに捕殺する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○深耕時には堆肥を計画的に施用する。その際断根を極力少なくする。</li> <li>○有機物（または堆肥）によるマルチ。堆肥は完熟したものを十分に施用する。</li> </ul>	有機物 （または堆肥） 2～3t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○根域への表層施用を基本とする。</li> <li>○有機質肥料による施肥を行う。</li> </ul>	成分量で施肥基準 以下  有機質肥料併用の 場合には化学肥料 低減率20～50%
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○病葉、病枝を速やかに除去し、無機銅剤をローテーション散布に位置づける。                          （対象：かいよう病、そうか病など）</li> <li>○マシン油乳剤や石灰硫黄合剤を活用する。                          （対象：カイガラムシ類、ハダニ類）</li> <li>○機械除草を行う。</li> </ul>	慣行使用回数の 20%減
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>○基肥の窒素は早めに施用し、気温の低下とともに窒素肥料が切れる状態を目指す。追肥は、2番枝の伸長具合を見ながら行う。窒素の遅効きは新梢の充実を妨げ、耐寒性を落とすとともに果実品質を低下させるので注意する。</li> <li>○若木のうちは、寒さに弱いので、防寒対策を行うとともに、窒素肥料は控えめにする。</li> <li>○かいよう病やそうか病については、苗からの持ち込みが多いので、注意する。</li> <li>○カイガラムシ類の防除には、冬期の機械油乳剤が効果的である。</li> <li>○施肥量の基準は樹齢、樹体に応じたものとする。</li> </ul>	

カンキツ類（温州ミカン、レモン類、ユズ類、雑柑類）

（灰色低地土）

〔土壌肥料〕

保水力のある肥沃な土壌を好むので、乾湿の差が大きくなりがちな灰色低地土については、有機物を施用して、土壌の改善を図る。根群分布は比較的浅いたため、有効土層を広げ、根域を大きくする。多肥を好む果樹だが、枝梢の生育状況や収量、また生育ステージ等に応じて調節が必用である。

土壌表面管理としては、清耕法、草生法、有機物によるマルチ法などがある。土壌中の有機物を増加させ、土壌の団粒化を図ることで安定した養水分環境を確保する。

〔病虫害・雑草防除〕

そうか病やかいはよう病は、降雨を考慮しながら発生初期の防除が必要である。また、窒素肥料の過多による軟弱徒長は病害を助長するので、適正樹勢を保つ施肥管理は病虫害防除の観点からも重要である。風通しの悪い園では、カイガラムシ類やアブラムシ類、ハダニ類の発生が多いので、適正な整枝・せん定管理を行う。アゲハチョウが繰り返し産卵するので、卵や幼虫はこまめに捕殺する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○深耕時に堆肥を計画的に施用する。その際断根を極力少なくする。</li> <li>○有機物（または堆肥）によるマルチ。堆肥は完熟した低成分含量堆肥を施用する。</li> </ul>	有機物 （または堆肥） 3t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○根域への表層施用を基本とする。</li> <li>○有機質肥料による施肥を行う。</li> </ul>	成分量で施肥基準 以下  有機質肥料併用の 場合には化学肥料 低減率20～30%
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>○BT剤をローテーション散布に位置づける。                      （対象：カキノヘタムシガ、ケムシ類、ハマキムシ類）</li> <li>○機械除草を行う。</li> <li>○性フェロモン剤により交尾阻害を図る。                      （対象：ヒメコスカシバ）</li> </ul>	慣行使用回数 の 20%減
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>○基肥は落葉後早く施用する。追肥の時期は、早過ぎると新梢の充実が悪く耐寒性がなくなり、遅すぎると果実品質に影響するので注意する。</li> <li>○若木のうちは樹冠下清耕またはマルチ法とし、雑草との養水分の競合をさける。</li> <li>○円星落葉病は、落葉の圃場外への除去が有効である。防除適期を把握し、遅れないようにする。</li> <li>○炭疽病は、せん定を行い、風通しを良くする。</li> <li>○こも巻き・粗皮削りおよび適期防除                      （対象：カキミガ、カイガラムシ類、アザミウマ類）。</li> <li>○施肥量の基準は樹齢、樹体に応じたものとする。</li> </ul>	